

柏崎での戊辰戦争

西 羽 晃

慶応4（1868）年の正月3日に鳥羽伏見で始まった戦いの噂が、桑名藩の飛び領地である越後柏崎に7日に伝わってきます。4日ほどで情報が来たこととなります。柏崎に敵（新政府軍）が攻めてくるかも知れないので、慌ただしい日々が続きますし、町民は御用金を献納したりしています。2月4日には桑名城が無事に開城した情報も入り、戦争にならなかったことを町民は喜んでいます。

慌ただしい日々の中でも日常の業務がありますが、宗門改めは当分見合わせるとの通達が3月19日に出されています。3月23日には江戸から藩士が来ることが伝えられ、それ以後に追々と藩士が到着しています。藩主の松平定敬も来ますので、勝願寺を宿舎とするための工事を行うため、25日から町中の大工が集められます。藩主到着の際の行事も従来なら道筋の家の前に盛り砂をするのですが、非常の場合なので、盛り砂は省略するように通達されます。

3月30日午後、定敬一行は柏崎に到着します。4月1日には桑名藩の米が払い下げのため入札されたり、12日には宗門改めが実施されたり、日常の業務も行われています。定敬の側近にあって、穏健な家老・吉村権左衛門は恭順派でしたが、閏4月3日の閏夜に暗殺され、恭順派の勢力が弱くなりました。そこへ同月12日、戦場で戦ってきた桑名藩軍の大勢が柏崎に到着し、抗戦派が多くなりました。

江戸から来た藩士は生々しい戦場体験をもってきましたが、元から柏崎に居た桑名藩士は戦場体験がなく、もっぱら裏方として活躍しています。何しろ500人ほどの人が泊まるための宿舎・夜具・食糧の手配などが必要なのです。そこで渡部平太夫が陣頭指揮にあたっています。平太夫（幼名・真吾）は祖父が「桑名日記」の筆者であり、父は「柏崎日記」の筆者ですが、父の代に柏崎に赴任し、そのまま桑名へ戻れずに父子が柏崎で勤務していました。彼はこまごまとして仕事を処理する有能な藩士でした。

閏4月13日には定敬の許で会議が開かれ、抗戦の意思統一を固め、他の藩や旧幕府の武士をも含めて約500人ほどで桑名藩軍が再編成されました。藩士の家でも家財道具を荷造りして、最寄りの家に預けています。その知らせが町に伝わりますと、町民たちも戦争が始まることをおそれ、家財道具をまとめて、近くの村へ疎開させています。16日には定

敬は戦場を避けて、旧幕府領の加茂へ移動しています。

閏4月27日に柏崎郊外の鯨波で戦闘が始まりました。この日に桑名藩士。駒木根元一が戦死しました。今も柏崎市東の輪薬師堂に彼の墓は建っています。桑名藩軍は有利に戦いを進めましたが、後方からの支援がないので、柏崎を放棄して撤退していきました。



駒木根元一の墓（柏崎市）

しかし元から柏崎に居た藩士の多くは柏崎に止まり、新政府軍に降伏しました。彼らは捕虜として家族とも収容され、39軒・家内男女子どもを含めて150人ほどが7月19日に船で柏崎を出て、途中は風待ちで日数がかかり、8月2日に敦賀に着き、後は大垣まで陸路を歩き、大垣から揖斐川を船で下り、桑名へ戻ってきました。渡部平太夫も家族を連れ桑名へ来ました。その時に「桑名日記」、「柏崎日記」も携えてきたと思われます。